

小説を書くこと、そして小説の喜びを伝えること

Writing novels and Sharing the joy of fiction

岡崎隼人

①小説を書くこと

②小説の喜びを伝えること

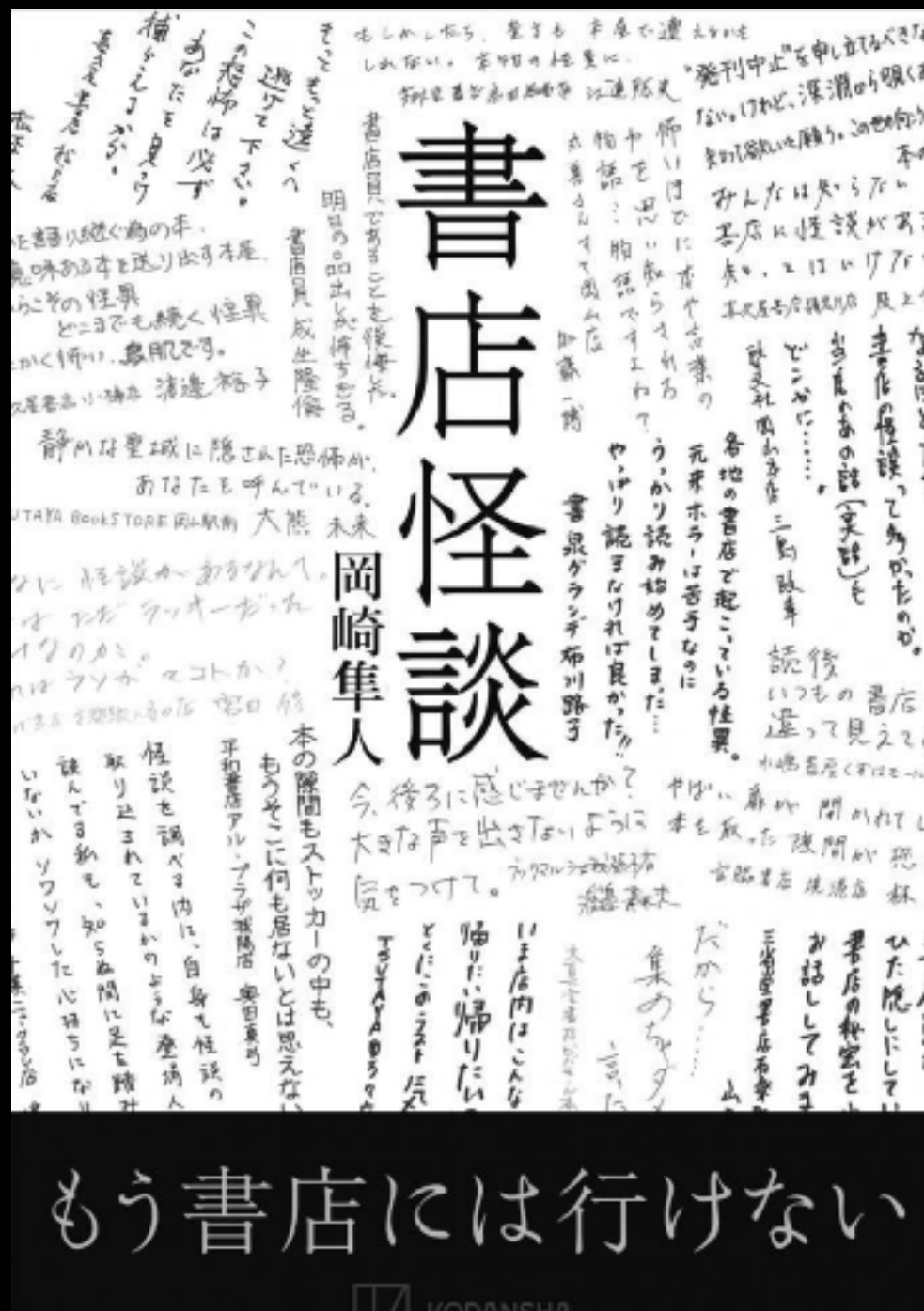
①小説を書くこと

自己紹介、作品例

自己紹介

- 岡崎隼人／小説家
- 1985年生まれ／岡山市出身、岡山市在住
- 2006年、メフィスト賞（講談社）を受賞し、デビュー

作品例



『少女は踊る暗い腹の中踊る』



- ・ デビュー作／長編小説
- ・ あらすじ／岡山市で連続して発生する「乳児誘拐事件」に、主人公の青年が巻き込まれる。物語を通じて、主人公は過去のとある罪悪感と向き合ってゆく。

『だから殺し屋は小説を書けない。』



- 長編小説2作め
- あらすじ／幼い頃から殺し屋として育てられてきた青年が主人公。あるとき彼は、「小説」というものを生まれて初めて読んで心を奪われる。ところが、次に彼が殺さなければならない相手が、まさにその小説を書いた小説家であることがわかってしまう。彼は、葛藤の末にその小説家を守るために動き始める。舞台は瀬戸内海に浮かぶ島。

『書店怪談』

- ・ 長編小説3作め／初のホラー作品
- ・ あらすじ／岡山市に住む小説家の岡崎隼人が、「書店を舞台にしたホラー小説」というアイデアを思いつく。その取材のため、実際に全国各地の書店員から、職場で体験した怖い話を募集する。話は大量に集まる。ところが、地理的に遠く離れた複数の店舗で、どうやら同じ怪異が発生しているのではないかということに気づく……。
- ・ 実際に日本中の書店員さんたちから、体験談を募集して制作した。
- ・ 韓国で翻訳出版されることが決定！



もう書店には行けない

新作3月出版&アニメや短編なども



- ほか、アニメのシナリオや、短編小説やエッセイなども手がける
- 3月、新作長編小説出版『ハンドレッドノート —名探偵 司波 仁の事件簿—』

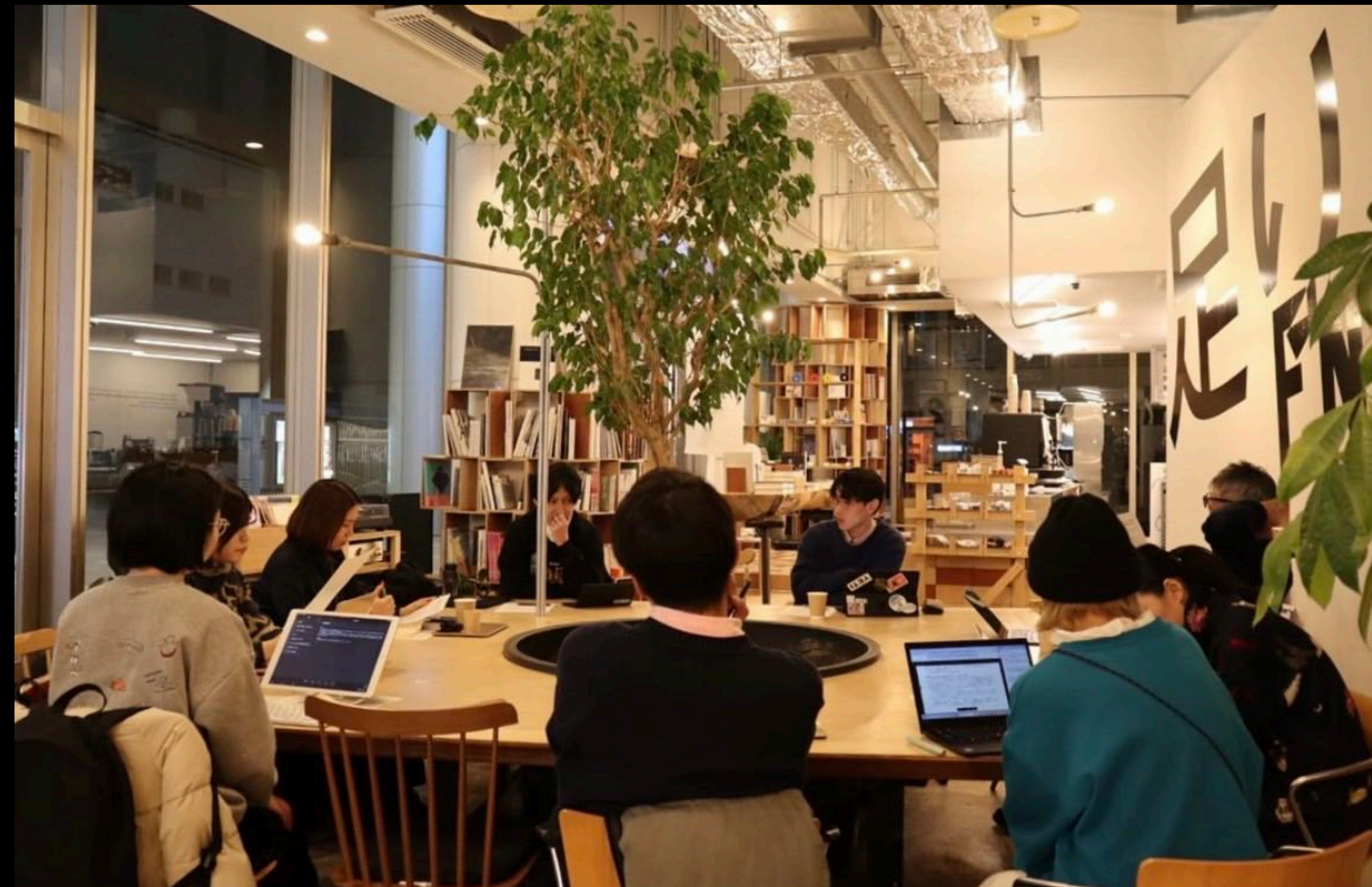
スランプの存在

- デビュー作から2作目の間に、深い深いスランプの時期がある。
- 17年間、書けなかった。毎日執筆はしていたけど、満足するものが作れなかった。今、命があるのが不思議なくらい追い詰められた。
- その間、コピーライターとして働きながら、「古今東西の物語」を大量かに、徹底的に研究した。また、広告が得意とする「伝える技術」を身につけた。→そうして、スランプを乗り越えた。
- 今も、岡山市で小説を書き、専業作家として生活している

②小説の喜びを伝えること

さまざまな方法で、岡山の人々に創作術を発信しています

小説講座



- ・市内のブックカフェにて小説講座を開催。
- ・2024年11月からスタート。これまでに全8回開催。
- ・「ストーリー編」「キャラクター編」「文章編」などとわけて、小説を書くための重要なトピックスを伝える。
- ・参加者は、なんとなく小説に興味がある人から、本気で小説家としてデビューしたい人まで、さまざま。
- ・私自身が長いスランプ期間のあいだ、創作術を徹底的に研究し続けたことが役に立っていると思う。

創作ワークショップ



- 市内のカフェバーにて創作ワークショップを開催。
- 2024年7月からスタート。月に一度、平日の夜に開催。参加者は毎回10人～15人集まる。
- 毎回、「創作のルールそのものをつくる」ことから始まる。例／参加者全員で、ひとつのリレー小説を即興的に作る。ただし、それぞれ、ランダムな単語が記されたカードを引く。各自、文章にその単語を必ず盛り込まなくてはならない。など。
- 昨年はZINEができた。今年も作る予定。

講演会&各種トークイベント



- 講演会や各種トークイベントにも積極的に出演。小説の魅力について、発信、対話を続けている。
- 例1 / 公益財団法人 吉備路文学館にて
(2025.10.25)

講演会&各種トークイベント



- 例2 / 岡山駅前の書店にてトークイベント (2025.8.15)
- 岡山の書店員さんたちが、店舗の垣根を超えて6店舗から集結してくれた。これは極めて異例なこと。で、自著『書店怪談』に関する座談会を行った。
- 平日夜にも関わらず60人以上の参加者がつめかけて会場がいっぱいになった。地元のテレビ局や、講談社のyoutubeチャンネルも取材に訪れた。
- ほか、文章教室の講師を務めたり、読書会などに出演したりなどなど、積極的に小説の喜びを発信し続けている。

「なぜ、そんなことをするのか？」

- では、なぜ時間を割いて、そんなことをするのか？
- 別に、家で小説だけ書いていれば、生活はできるはずだろう？ 時間を割いて、小説講座とか、ワークショップとか、する必要はないのでは？
- ↑この答えは、「今後の展望／ビジョン」とそっくり重なる。

展望／小説と地元之恩返ししたい

- ・ ① 『一人でも多く小説を読む人、書く人を増やしたい。』
- ・ 幼い頃から家庭にも学校にも居場所がなかった。それを本、とりわけ小説に救われてきた。いま、自分は小説に恩返しをしたい。具体的にいうなら、小説を読む人、書く人を増やしたい。そうやって小説という芸術の炎を絶やさず、大きなものにしていきたい。

展望／小説と地元にも恩返ししたい

- ・ ② 『岡山の書店業界を活性化したい。』
- ・ 幼いころから、街の書店に入り浸っていた。むしろそこが苦しい現実から身を守ってくれるシェルターだった。だから、今、そこを盛り上げたい。なので、イベントでも講座でもなんでもやって、本屋に行く人を増やしたい。

展望／小説と地元之恩返ししたい

- ・ ③ 『岡山市を小説で盛り立てたい。』
- ・ 私はほぼ全作品に岡山を登場させている。なぜなら作品の舞台としても愛してるし、故郷としても愛してる。作品をきっかけとして、岡山市を盛り立てたい。いわゆる聖地巡礼。コンテンツツーリング的にも。
- ・ 実際に先日も、私の読者の方が、県外（関東）から岡山に来て聖地巡礼的に観光してくれたという声を聞いた。こういう方が増えたら嬉しい。
- ・ 微力ながら、今後も岡山で小説を書き、その魅力を発信していきたい。

ありがとうございました！

Thank you for your attention!